

世俗社会の聖地巡礼： 信仰なき巡礼ツーリズムの広がり

岡本亮輔
北海道大学

1. はじめに—宗教とツーリズム論の視座

聖地巡礼は、世俗化が進展する先進社会でもっとも活発な宗教行動の1つと言える。特に欧米のキリスト教会で伝統的に行われてきた礼拝や儀礼への参加者が時とともに減少し、宗教的な価値観や規範への疑問が公に唱えられるようになる中、聖地巡礼はますます多くの人々を動員するようになっていく。本稿では、制度宗教や組織宗教がその権威や影響力を失う世俗社会における聖地巡礼を取り上げ、その興隆を宗教実践の脱信仰化という文脈の中に位置づけてみたい。

現代の聖地巡礼については、その観光化を焦点としながら、国内外で研究が蓄積されてきた。国外では、J・イードやD・チデスターといった研究者が1990年代から聖地の構築性に注目し、キリスト教会の影響力が低減したことで、聖地において聖俗双方を含む様々なアクターが競合するようになり、その結果、聖地が多様な言説・行動・体験を生み出す場へ変化していることが論じられてきた¹。そして、聖地に影響を与える世俗的要因の中でも観光が占める部分は極めて大きく、2000年代以降もエルサレムの観光化の歴史とその政治的影響²、宗教的な文化遺産や遺跡の管理と観光化や宗教団体による観光の利用³、国家による宗教と観光の管理動員などの調査研究が積み重ねられてきた⁴。

日本は、こうした聖地巡礼と観光の交錯を論じる絶好の場と言える。というのも、伊勢詣、熊野詣、四国遍路といった古くからの巡礼の歴史が存在し、近代以前から巡礼と娯楽の要素が不可分だったからである。日本の巡礼研究の第一人者である宗教学者の星野英紀は、四国遍路を事例に、本質を旅とする巡礼にはそもそも僧侶のような「プロの宗教者」の介在が希薄であり、巡礼の場が伝統宗教の思惑とは異なる多様な体験を生み出しうることを早くから指摘している⁵。

そして、日本で体系的かつ網羅的な宗教と観光の研究プロジェクトを立ち上げたのが、宗教社会学者の山中弘である。山中の編んだ『宗教とツーリズム』や『聖地巡礼ツーリズム』といった書籍では、欧米と日本に限らず、上座仏教やイスラムの事例も取り上げられ、聖地の構築や宗教消費といった観点からの比較分析が行われている⁶。より近年では、物質的宗教論や経営学の経験価値論など、新たな

視覚からのアプローチも試みられている⁷。

こうした研究動向の中で、文化人類学者の門田岳久が提起した「巡礼ツーリズム」概念は特筆に値する。門田によれば、宗教と観光の融合はそもそも宗教とは関係なかった観光産業が足と寝床の手配という強みを生かした企業活動の一環として生じたもので、巡礼ツーリズムは旅行商品の一形態なのである。つまり、現代の聖地巡礼に多様な人々が参加し、そこで様々な体験や語りが生まれるのは、観光産業の下支えがあって初めて可能になるのである⁸。

筆者自身も上記の問題意識と研究視座を共有しながら、主に現代のヨーロッパと日本の聖地巡礼について調査研究を行ってきた⁹。フランス、スペイン、旧ユーゴスラビア、日本と地域は様々であり、背景となる社会文化は大きく異なる。だが、いずれも伝統宗教の影響力が何らかの形で制限され、個人化した巡礼形態が顕著である点では通底している。そこで本稿では、聖母出現聖地、徒歩巡礼、パワースポット・ブームの3つの巡礼形態を鳥瞰し、メディアによって脱信仰化する巡礼ツーリズムという観点から捉え返してみたい。

2. メディアの中の聖母たち

2-1. 巡礼アトラクションとしての聖母出現

カトリックの聖地では、長らく聖遺物がその場所の聖性の根拠となり、現在も崇敬対象になっている。聖遺物とは、主に聖書の登場人物や聖人聖女の遺骸やその一部、あるいは彼らが生前に触れたとされる遺品のことである。

言うまでもなく、イエスに関わるアイテムが重視される。イエスが処刑まで身につけていた衣服、頭に被せられた荊の冠、十字架に打ちつけるのに使われた釘、わき腹を刺したローマ兵ロンギヌスの槍、処刑後に頭部や身体を覆った布やそれに付着した血液、そして十字架の破片などが聖遺物として世界各地の教会に保存されている。

イエス関連以外の聖遺物も無数に存在する。イエスの処刑を見届け、復活に立ち会ったマグダラのマリアの頭蓋骨、皇帝ネロの迫害によって逆さ十字に架けられたペトロを拘束した鎖、祝祭日にだけ液体に戻るとされる聖ジェンナーロの血塊、ナチス収容所で他の囚人の身代わりに餓死刑となったコルベ神父の遺髪など、枚挙にいとまがない。次節で取り上げるサンティアゴ・デ・コンポステラも、十二使徒の一人である聖ヤコブの遺骸が発見され、それが聖遺物として安置されている。他にも、様々な時代と地域の聖人聖女たちの聖遺物が世界各地に残されて

世俗社会の聖地巡礼：
信仰なき巡礼ツーリズムの広がり

いる。聖遺物の多様性は、カトリックの地域的・歴史的な広がり大きさを物語っていると言えよう。

カトリックの教義では、聖遺物そのものに何か不思議な力や奇跡を起こす力が宿っているとされるわけではない。あくまで人々を信仰に向かわせるための手段である。聖なる人々の物理的痕跡を目にすることで、信仰に一層の深みをもたせるということだろう。とはいえ、一般の信仰者にとっては、聖遺物を前に祈ることは通常の祈りよりも濃厚な体験であり、救済へ至るための近道だと感じられる。だからこそ、聖遺物は、伝統的なカトリックの信仰世界において聖地巡礼を成立させる主要アトラクションであった。聖遺物には並外れた力が秘められていると信じられてきたからこそ、それを一目見るために目的に多くの人が旅したのである。

しかし、現代では、聖遺物の信憑性は大きく掘り崩されている。そもそも、中世にはすでに聖遺物を取り扱う専門業者が存在しており、あからさまな「偽物」が数多く残されている¹⁰。検死のためにイエスのわき腹を突いたとされる聖槍をはじめ、イエスの血を含んだという聖骸布や聖釘は無数に存在する。イエスを打ちつけた聖十字架の破片とされるものを世界中から集めれば高層ビルが建てられるなどと冗談半分で語られることもある。近年では、こうした聖遺物に対して年代測定が行われ、イエスの時代よりも遙かに後に作られたことが科学的に明らかにされる場合もある。こうした由来不明の物を本物や聖なるものとして受け止めることは、世俗社会ではますます難しくなっている。

2-2. 女子修道院の聖母

聖遺物という静的な物を中心に構成されるカトリック聖地のあり方を大きく変えたのが、聖母出現という動的な現象だ。聖母出現は古くから各地で伝承されてきたが、本稿にとって重要なのは、西欧が近代化を迎えた 19 世紀以降、特にフランスを中心に証言・記録された一連の出現である。その先駆となったのが、奇蹟のメダル教会（以下、メダル教会）の聖母出現である。

メダル教会が位置するのはセーヌ河左岸のバック通り 140 番地である。元々は一般に開かれた場所ではない。女子修道会である愛徳姉妹会の本部として 1815 年に建てられた修道院内のチャペルである。ここで聖母を目撃する見神者となったのが、カトリーヌ・ラブレ（1806～1876 年）である。彼女は、修道会に入った直後から、愛徳姉妹会設立者の聖ヴァンサン・ド・ポールの心臓、王の姿のキリス

ト、聖母マリアなどのヴィジョンを見たと言われるが、画期となる聖母出現は 1830 年 11 月 27 日午後 5 時半頃に訪れる。

見習修道女としてチャペルで黙想していたラブレは、地球の上で蛇を踏みつけ両手から光を発する聖母を幻視し、「この光は私が人間に対して注ぐ恵みの象徴である」という声を聞く。そして、聖母を囲むように「原罪なくして宿り給いしマリア、御身に依り奉る我等のために祈り給え」という金の文字が浮かび上がる。しばらく経つとヴィジョンは反転し、12 の星が囲む中に、上部には十字架と組み合わさった M の文字が、そして下部には 2 つの心臓が現れる。1 つは荊を被せられたイエスの心臓で、もう 1 つは剣が刺しぬく聖母の心臓だ。そして、「このモデルにしたがってメダルを作りなさい。それを身につけ、この短い祈りを行う者は聖母の特別な保護を受けるだろう」という声を聞くのである。



写真 1：教会内にある奇蹟のメダルのレリーフ（著者撮影）

この出現の後、紆余曲折を経て 1832 年に最初の 2000 枚のメダルが刻印され、時の教皇グレゴリオ 16 世の下にまで行き渡る。そして、メダルを身につけていたことによる事故や諍いからの庇護、当時流行していたペストの治癒、また非キリスト者の劇的回心などが相次いで報告される。その結果、1839 年には 1000 万枚以上、ラブレが亡くなった 1876 年には 1 億枚以上が普及していたとされる。

こうしたメダル流行をうけて、本来は修道院内のチャペルであるメダル教会への一般の巡礼が許可され、建物の規模も徐々に拡大された。筆者がメダル教会から入手した 2006 年の統計によれば、毎年 300 万人程度の巡礼者がいると推察さ

世俗社会の聖地巡礼：
信仰なき巡礼ツーリズムの広がり

れる。

以上がメダル教会の聖母出現のあらましである。メダル教会の出現はその後の近代聖母出現群を導く先駆けなのだが、ここで注目したいのは、先駆けであったがゆえに、その後の聖母出現に見られる特徴が欠落していることである。

宗教人類学者の関一敏は、メダル教会以後のフランスの一連の聖母出現を取り上げ、聖母の幻視という見神者の主観的体験が信憑性を獲得してゆく過程を明らかにした¹¹。例えば後述するルルドの出現の場合、見神者であるベルナデットは「聖母を見た」とは一度も言っていない。十数回に渡る出現過程において、洞窟に集まる人々、知識人、教会、警察・役場をはじめとする町当局などが相互干渉し、それぞれの立場から肯定・否定を与え続ける。その結果、ベルナデットが「あれ」と呼んだものが次第に聖母として共有され、「洞窟のマリア」という物語が構築された。そこでは、ベルナデットの周囲の人々も、語り手として聖母出現の構築に参加しているのである。

しかし、メダル教会の出現は、それが修道院のチャペルという閉鎖空間で生じたため、他のエージェントを有さない。ルルドの場合、洞窟に集まった群衆たちは時にはベルナデットと信者と司祭のような関係を結び、彼女を聖者と見なし、彼女が「あれ」としか呼んでいないものを聖母と噂した。だが、メダル教会の聖母は修道院内の礼拝堂に1人でいた24歳の修練女に顕れた。その後の見神者の多くが10歳以下の子供であるのに対して、ラブレはすでに成人し、末端とはいえ教会組織の構成員であった。そのため、メダル教会の出現譚には、教会秩序の下や外から出現を彫琢しようとするエージェントの介在は構造的にあり得なかったのである。

2-3. 密室を出る聖母たち

メダル教会の出現は世俗から隔てられた密室で生じたため、見神者のラブレが生ける聖女として一般に姿を現すことも、勝手にメッセージを発することもなかった。その意味で、メダル教会の出来事は、教会が管理しやすい聖母出現だったと言える。これに対して、その後の一連の聖母出現では、諸アクターが積極的に聖母出現に介入し、聖母はより饒舌になり、多動化してゆく。

メダル教会以降、19世紀後半のフランスでは聖母出現が立て続けに生じる。特にカトリック教会がその崇敬・巡礼を承認しているのはラ・サレット（1846年）、ルルド（1858年）、ポンマン（1871年）の3件であるが、これらでは、より個性

的な聖母が出現する。

ラ・サレットの聖母は、1800 メートルの山の上で2人の子供の前に顕れた。その聖母は、岩の上に腰掛け、顔を覆って静かに泣いていた。聖母は子供たちを呼ぶと立ち上がり、村の人々が正しい行いを守らないために大飢饉が起きると予言し、これを皆に伝えるように告げたのである。

前述のルルドの聖母出現は、ピレネー山麓の村の貧しい羊飼いの娘だったベルナデッタが薪拾いに出かけた際、河岸のマッサビエル洞窟に「何か白いもの」を見たことに始まる。そして、その白いものは続く17回の出現過程で自らを「無原罪の御宿り」だと宣言し、周囲の人々にも聖母として了解されてゆく。また、ルルドの聖母が与えたメッセージには、ベルナデッタへの私的啓示に加えて、聖堂建設や巡礼招致など、ルルドの聖地化を動機づける要素が含まれていた。さらに、よく知られるように、ルルドの出現では、奇蹟的治癒をもたらすとされる泉がわき、その水を飲み、体を洗えというメッセージも告げられるのである。

ポンマンの聖母はオーロラを前兆に伴い、村の民家の屋根の上に現れた。その場には、見神者の子供たち以外の村人もおり、修道女や司祭もいたが、出現の一部始終を見たのは子供たちだけであったという。聖母は、空に1つずつ文字を浮かべてメッセージを伝え、普仏戦争の終結と出征した村人の生還を予言したとされる。

このように、メダル教会以後の聖母たちは、山上、洞窟、村の上空といった公開空間に、複数人が見守る中で顕れる。さらに涙を流したり、文字を浮かべたりするなど、メダル教会の聖母がメダル鑄造の見本のためのいわば下絵として出現したのとは比べて、はるかに動的な印象を与える。そして、こうした傾向は、20世紀以降のメディアの興隆によってさらに促進される。

2-4. ネット配信される聖母出現

20世紀以降、ますます広い地域で多くの聖母出現が証言されるようになるが、その中でももっとも開放的かつ多動的なのが、現在も多くの賛否を集めるメジュゴリエの聖母である。

メジュゴリエが位置するのは、ボスニア・ヘルツェゴビナ南部である。元々は僻地の小村だ、2000年代に入ってから例年150万から180万程度の聖体拝領が執り行われている¹²。こうした統計にあらわれない訪問者もいることを勘案すれば、少なくとも毎年200万人以上の巡礼者がいると見積もれるだろう。なぜ、こ

世俗社会の聖地巡礼：
信仰なき巡礼ツーリズムの広がり

れほど多くの人が集まるのか。それは 1981 年以来、聖母が出現し続けているからである。

最初の出現は 1981 年 6 月 24 日、メジュゴリエからほど近い丘で生じた。10 歳から 16 歳の 6 人の少年少女が見神者となった。彼らは聖母の姿をぼんやりと見たただけだったが、それから出現は毎日続き、次第に具体的なメッセージを受け取るようになる。そして聖母の噂は急速に広がり、5 回目には 15000 人が集まったという。

メジュゴリエの出現が議論を呼ぶのは、聖母そのものが論争的だからと言える。例えば 1981 年 11 月の初め、聖母は当時の教皇ヨハネ・パウロ 2 世の写真を持って出現し、彼こそが全ての父であり、教皇のために祈るようたびたび告げる。そして、教皇暗殺未遂事件の直後には、「敵は教皇を殺そうとしましたが、私が護りました」と述べ、クロアチア語で平和を意味する「MIR」という言葉を教皇に託すよう伝える。一見は教皇に寄り添うように思われるが、教皇に対して新たな啓示を与え、上から指示するかのようなメッセージとも理解できる。こうした聖母の言動は、教会の秩序や教皇の権威を脅かしかねないものである。



写真 2：メジュゴリエの最初の出現があった場所（著者撮影）

さらに、ほとんどの聖母出現が一定期間で収束し、見神者たちの多くが早逝するか教会組織に加わっているのに対し、メジュゴリエの聖母は数十年に渡って出現し続け、膨大なメッセージを伝えており、その過程では、見神者の聖人化と呼

べるような現象も生じている。

最初の出現があった丘の周囲には多くの土産物店が軒を連ねるが、その一角に見神者の1人であるヴィッカがかつて暮らした家がある。その家は、現在、巡礼者向けに公開されているが、扉にはヴィッカの大きな写真が貼られ、その上には、この建物がメジュゴリエの巡礼ポイントであることを示す掲示がある。建物内にもメッセージを伝えるヴィッカの写真が飾られる。廊下のつきあたりには、巨大なヴィッカの肖像画がある。白いワンピースを着て、両手を合わせて空を見るその姿は、巡礼者に対してヴィッカが聖女であることを暗示するだろう。

別の見神者のミルヤナの場合、多くの人が見守る中で毎月メッセージを受け取り続け、その様子が YouTube などでもネット配信されてきた。多い時には数千人もの群衆が彼女を取り囲む。無数のカメラが向けられる中、ミルヤナは空を見つめて聖母の声を聞き、時に涙を流し、体を震わせる。

前述の通り、ルルドの出現でもベルナデットが時に聖人視されたが、メジュゴリエでは、それが複数の成長した見神者に対して数十年に渡って続いているのである。こうした見神者のカリスマ化は、教会秩序の外側に新たな権威を生み出しかねず、カトリック教会にとっては、聖母出現という奇蹟がもたらすもつとも歓迎せざる副作用なのである。

そして 2019 年 5 月、教皇フランシスコによって、メジュゴリエに大きな変化がもたらされた。メジュゴリエへの巡礼が許可されたのである。しかし、教皇は同地での聖母出現を認めたわけではない。そもそも、フランシスコはメジュゴリエには否定的である。2015 年 6 月にボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボを訪問しているが、メジュゴリエには立ち寄っていない。さらに 2017 年 5 月には、個人的見解として「明日、この時刻にここへ来ればメッセージを伝えるなどと、聖母マリアが言うわけがないのは明らかだ」と語り、メジュゴリエの聖母を強く否定している。

フランシスコが認めたのは巡礼という実践だけである。メジュゴリエには毎年多くの巡礼者が集まり、回心体験も報告されている。そのため、司牧的判断として同地への巡礼が認められたのだ。言い換えれば、聖母出現という奇蹟は否定しつつ、その場所へ向かう実践だけを認可したのである。

こうした過程は、世俗社会で教会の権威と求心力が失われる中、アトラクションとしての聖母出現が持つインパクトを教会が管理しながら利用しようとしたものと言える。だが、メジュゴリエの巡礼者の多くは、継続する聖母出現という

世俗社会の聖地巡礼：
信仰なき巡礼ツーリズムの広がり

奇跡を信じているからこそ同地を訪れるはずだ。その意味で、メジュゴリエについては、教会自体が巡礼と信仰を切断する措置に踏み切ったものと理解できるのである。

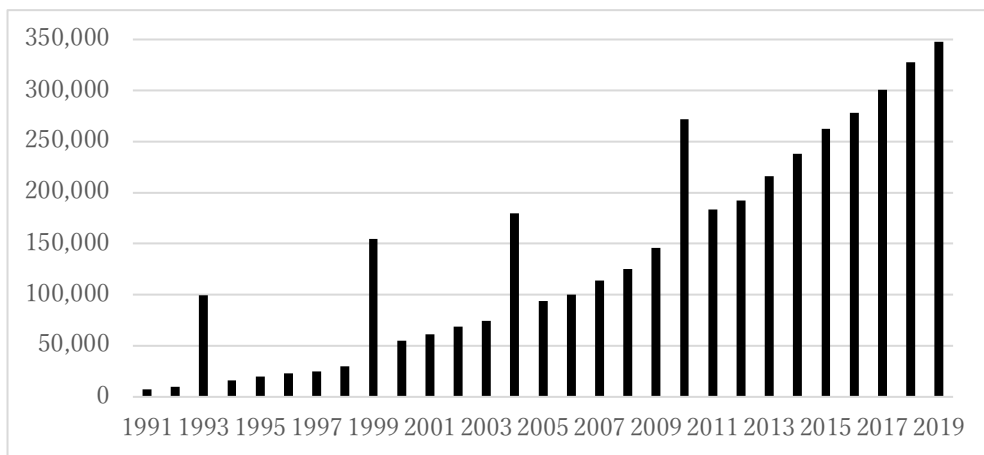
3. サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼の興隆

3-1. 巡礼の概要

本節では、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼（以下、サンティアゴ巡礼）を取り上げる。前節で見た聖母出現地は、その核にあるのが超越的存在の示顕という奇蹟であるため、基本的には信仰者を対象とした聖地巡礼と言える。

一方、サンティアゴ大聖堂は、エルサレム、ローマに次ぐカトリック第3の聖地として知られ、現代の聖地巡礼の復興の例として必ずと言って良いほど言及されるが、現代の巡礼者たちは必ずしも敬虔なカトリック信徒ではない。むしろ、そうでない巡礼者の姿が遥かに目立つ。キリスト教の他教派は当然として、他宗教・無宗教の巡礼者たちも珍しくない。なぜ、こうした非信仰者たちの聖地巡礼が活性化しているのだろうか。

サンティアゴ大聖堂には、使徒ヤコブの遺骸が聖遺物として祀られる。伝承では、9世紀初頭にヤコブの埋葬地が発見され、最初の教会堂が建設され、ヤコブの聖遺物を目指す巡礼が中世を通じて活発になったという。だが、そうした状態が現在まで途切れなく続いてきたわけではない。



グラフ1：巡礼証明書の発行数 1991～2019（著者作成）

上のグラフは巡礼証明書の発行数の変化である。巡礼証明書は、徒歩で 100km 以上、自転車で 200km 以上巡礼した者に与えられる。ヤコブの日（7 月 25 日）が日曜にあたる聖年に突発的に巡礼者が増えているが、それ以外の年は、1990 年代までは最大でも 3 万人程度である。だが 2000 年代以降、急激な増加を見せる。2000 年に 5 万人、2006 年に 10 万人、2009 年に 15 万人、2015 年に 26 万人、そして 2018 年に 32 万人と急増し、2019 年は 35 万人弱となっており、1991 年（7274 人）から 30 年弱で、50 倍近くに増加したのである。

巡礼者の国籍を見ると、2007 年頃からスペイン国籍が半数を下回り、イタリア、ドイツ、フランス、アメリカ、イギリスなどが目立つようになる。また少数ではあるが、地理的・宗教文化的に遠い日本国籍（2019 年 1452 人）やフィンランド国籍（同 755 人）の巡礼者数も増加傾向にある。アジア圏でもっとも多い韓国籍の場合には、2000 年代前半には数十人程度であったが、2019 年には 8200 人超に急増している。



写真 3：サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂（著者撮影）

しかし、これら急増した巡礼者たちの多くは、カトリック信仰を持たない。彼らは、なぜ巡礼を始め、どこに魅力を見出しているのだろうか。この点を考えるために、一般的な巡礼者の生活を見てみよう。

まず巡礼のルートであるが、ピレネー越えを体験できるフランス側の終点サン・ジャン・ピエ・ド・ポーを出発し、パンブローナ、ブルゴス、レオン、アストルガなどを通るカミーノ・フランセス（フランス人の道）の人气が高い。8～10 キロ前後の荷物を背負い、毎日 20～25km 歩く。巡礼者は「クレデンシャル」というスタンプ帳を携帯する。宿・カフェ・レストランなどにスタンプが設置され

世俗社会の聖地巡礼：
信仰なき巡礼ツーリズムの広がり

ており、歩いた証明として休憩や宿泊の際に押印する。

巡礼路沿いには、スペイン語で「アルベルゲ」と呼ばれる巡礼者専用の施設が無数にある。ユースホステルのような雰囲気、複数段ベッドとシャワーが基本設備だ。国・州政府・地方自治体・民間・教会など運営は様々だが、多くは10～20ユーロ程度である。アルベルゲへの到着はだいたい13時から18時くらいまでで、22～23時頃に消灯となる。病気・怪我など特別な事情以外での延泊・連泊は認められない。

3-2. メディアが作った巡礼イメージ

それでは、なぜ現代のカトリック信仰を持たない巡礼者たちは、聖遺物が祀られる大聖堂を目指すのだろうか。多くの巡礼者が巡礼を知ったきっかけや始めた動機として挙げるのがメディア作品である。代表的なものをいくつか見ておこう。

1987年、ブラジルの小説家パウロ・コエリョ（1947年～）が、自らの巡礼体験を下敷きにした小説『星の巡礼』を刊行している。同書は、発売時点では大きな話題にはならなかったが、その後に書かれたコエリョ作品が世界規模でベストセラーになると、各国語に訳されて広く読まれるようになった。そして2000年には、『アウト・オン・ア・リム』（1983年）の発表以来、ニューエイジャーとして世界的に知られるようになっていた女優シャーリー・マクレーン（1934年～）が巡礼記『カミーノ―魂の旅路』を出版している。

この2つの作品は、多くの人が巡礼を知ったきっかけや巡礼を始めた動機として頻繁に言及するもので、現代のサンティアゴ巡礼興隆の直接的契機と呼んでさしつかえない。だが、いずれの作品も伝統的なカトリックの観点から書かれたものではない。

『星の巡礼』は、秘密宗教結社に属すると思われる主人公がマスターになるための試験に失敗し、その追試として巡礼を行う物語だ。巡礼過程ではガイドから様々な課題を与えられ、それをクリアしながら秘密結社での昇進のための追試として巡礼を行う。『カミーノ』はマクレーン自身の実際の巡礼体験に即して書かれたものだが、その記述にはマクレーンのニューエイジ的な宗教観・世界観が強く反映されており、過去生の追体験や守護霊との邂逅などが語られる。

映像作品としては、フランスのコリーヌ・セローが監督した映画『サン・ジャックへの道』（2005年）がある。原題を直訳すれば「サンティアゴ……メッカ」であるように、登場人物たちは、親の遺産を相続するため、好きな子と一緒にいるた

め、卒業旅行のため、大病と離婚の後の気分転換のためといった理由から巡礼を始める。映画の中でキリスト教は一貫して批判されるし、主題化することはない。長い旅の果てに信仰に目覚める登場人物もいない。

さらに 2006 年には、最大の商業的成功をおさめたサンティアゴ巡礼記が刊行されている。ドイツで出版された『巡礼コメディ旅日記―僕のサンティアゴ巡礼の道』だ。著者のハーペイ・カーケリング（1964 年～）はコメディアンとして知られる人物で、同書は人気絶頂の 2001 年に休業して巡礼を行なった時の体験記だ。ドイツ国内だけで数百万部を売り上げ、英語やオランダ語にも訳された。同書でも、伝統的なカトリック信者は巡礼の前後で変化しない人々として否定的に扱われ、むしろ仏教への親近感が語られる。

注目したいのは、カーケリングが巡礼を始めたきっかけがマクレーンの著作であったことだ。先行する非カトリック的な巡礼作品がさらに後続の非カトリック的な巡礼作品を生み出すというサイクルが見出せるのだ。そして、こうしたメディアでのキリスト教への懐疑と伝統的な信仰に縛られない体験の肯定というパターンは、それらの作品に触発されて巡礼を始めた多くの巡礼者に共有されるのである。

3-3. 巡礼路がもたらす交流

これら非カトリック的な巡礼作品の中で重視されるのが、アルベルグをはじめとする道中での他の巡礼者との出会いと交流である。本来、信仰者にとって巡礼の過程そのものは重要ではない。最重視すべきは大聖堂に安置された聖遺物であり、そこまでの道程は簡略である方が望ましいはずだ。ちなみに、サンティアゴ・デ・コンポステラはガリシア州の州都であり、国際線が発着する空港や高速鉄道が停車する駅も擁する。少し無理をすれば、パリやロンドンから日帰りすることも不可能ではない。しかし、現代の信仰なき巡礼者にとって、ヤコブの遺骸は目的になりえない。その結果として生じているのが道程の簡略化とは逆の傾向、つまり巡礼過程の引き伸ばしである。

メノナイト派の神学者アーサー・P・ボアーズは、巡礼記『歩いて道は作られる』において、サンティアゴ巡礼にはカトリック信仰とは異なる信頼と協働という価値観が見出せるとしている。会ったばかりで名前も知らない人と食住を共にし、親密なコミュニケーションをとるのが現代サンティアゴ巡礼の特徴だといっているのである¹³。ボアーズは、足を怪我した時に一緒にいた女性巡礼者のエピソード

世俗社会の聖地巡礼：
信仰なき巡礼ツーリズムの広がり

を挙げる。

彼女とボアーズはしばらく一緒に歩いていたが、彼が怪我をして歩みが遅くなると、女性は当初は面倒をみるのをためらい、独りで先に行ってしまう。だが、しばらくすると戻って来て、最終的には予定変更してボアーズを病院に送り届け、診察と治療にも立ち会ってくれたというのである。そしてボアーズは、現代の巡礼者たちがこの種の交流体験を重視していることを踏まえ、巡礼路そのものの神格化を指摘する。日常生活では見られない、他者との親密な交流体験が頻繁に生じるからこそ、サンティアゴ巡礼路は特別な空間に感じられるというのだ。



写真4：サンティアゴを目指す巡礼者（著者撮影）

筆者がインタビューした日本のサンティアゴ友の会の主要メンバーによれば、会員のほとんどはカトリック信仰をもっておらず、彼らに聖遺物崇敬や「ヤコブへの献身」といった意識はほとんど見られない。その代わりに、会員同士の会話では「カミーノ教」という言葉が頻繁に出るという。交流体験を与えてくれる巡礼の道そのものを重視する姿勢を端的に言い表した表現と言えるだろう。

さらに、こうした価値観はカトリック信仰を持つ人々にも浸透しつつある。筆者が同行調査したバス巡礼は、スペイン人神父2人が引率し、20数名の参加者全員が日本人のカトリック信者であった。フランス南部のトゥールーズを出発し、ルルドを経由して、数日かけてサンティアゴに向かう巡礼ツアーであったが、道

中、バスの車窓から徒歩巡礼者たちが見える。多くのツアー参加者は車窓から歩く巡礼者たちを撮影し、「彼らこそが本物の巡礼者である」と語る。さらに、予定変更してアルベルゲを訪れ、歩き巡礼の擬似体験をするような場面も見られた。

人類学者の土井清美は、こうした現代のサンティアゴ巡礼では、ヤコブはゲームのルールのある位置にあると分析する。大聖堂の聖遺物は、信仰なき巡礼者たちにとって旅の動機や目的にはなりえない。土井によれば、サンティアゴ巡礼に関してスペイン語で「ペルグリノス（巡礼者たち）」と言われる時には、「聖地に直行しない人々」というニュアンスすら含まれるようになっている¹⁴。

だがスペイン国内だけでなく、西欧を網の目のように覆う巡礼路を各人がばらばらに歩き回るだけでは、濃密なコミュニケーションは生まれない。そこにイベリア半島西端の聖遺物を目指すという素朴なルールを与えるのがサンティアゴ大聖堂である。このルールが設定されることで、信仰の有無とは無関係に「巡礼者」という肩書が有効化され、巡礼者は同じ目的を持った者として互いを認識し、巡礼路ならではの交流体験が可能になる。現代のサンティアゴ巡礼においては、ヤコブは信仰の対象ではなく、交流の背景に転じているわけである。

そして、こうした点で興味深いのが、近年になって始まった「距離証明書」の発行だ。巡礼者受付事務所によれば、巡礼のより詳細なデータを記載して欲しいという要望が多く、それに応えて2014年から発行されるようになったものだ。巡礼の脱信仰化と過程重視の傾向をわかりやすく反映していると言えるだろう。

3-4. モデルとしてのサンティアゴ巡礼

本節で最後に指摘したいのが、サンティアゴ巡礼に特徴的な信仰なき巡礼というスタイルが、他の地域に広がりつつあることだ。例えば韓国の済州島では、「オルレ」と呼ばれる全長400km以上のトレッキングコースが整備されている。きっかけは、雑誌記者がサンティアゴ巡礼に感銘を受けたことだ。彼女は、自分の故郷である済州島の魅力を歩いて味わうトレッキングコースの開発を思いつき、2007年にオルレが誕生した。

日本でも、伝統的な聖地巡礼がサンティアゴをモデルにしながら、現代的な変容を遂げつつある。その典型が熊野古道だ。熊野古道は紀伊半島に広がる本宮・新宮・那智の熊野三山への参詣道であり、2004年、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録された。登録以後、田辺から本宮へとつながる中辺路を中心に、大辺路、小辺路、伊勢路などを訪れる人が増加した。

世俗社会の聖地巡礼：
信仰なき巡礼ツーリズムの広がり

伊勢路の場合、暫定リストに掲載された 2001 年の来訪者数は 68000 人であったが、正式登録の 2004 年には 15 万人に急増し、2015 年以降は 30 万人を超えた。この数には日帰り客も含まれており、サンティアゴ巡礼の巡礼証明書の発行数とは意味合いは異なる。だが、2011 年には『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』で熊野古道が 3 つ星を獲得したこともあり、外国人の来訪者も増やしてきた。

「紀伊山地の霊場と参詣道」は、点在する寺社だけでなく、それらを結ぶ 300km 超の熊野古道も構成資産とする。登録活動が行われた当時、道そのものを構成資産とする物件は 1993 年登録のサンティアゴ巡礼路しかなく、その推薦書を参照して同じように道の両側 50m をバッファゾーンに定めるなど、当初からサンティアゴがモデルにされていた。だが本稿が指摘したいのは、こうした形式上の類似点だけでなく、巡礼をめぐる言説において同じように脱信仰化が見出せることである。

世界遺産登録から 6 年後、小田誠太郎が増加する来訪者や地域住民に対して違和感を示している。小田は仏教美術を専門とし、和歌山県のスタッフとして世界遺産登録の実務を担った人物だ。小田によれば、文化遺産として紀伊山地を見た場合、サンティアゴ大聖堂のような傑出した建築物があるわけではなく、その価値はわかりにくい。神道・仏教・修験道といった様々な「信仰の起源をなした特徴的な自然と社寺の建物・境内が一体となって形成している『文化的景観』」こそが価値であり、それを理解するには膨大な知識が必要となる。だが、来訪者のほとんどはそうした点に関心はなく、遺産の管理を担う地元市町村や社寺の職員も同様だというのである¹⁵。

それでは、彼らはどのような関心を持っているのか。「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産の中核の 1 つが熊野本宮大社だが、そのすぐそばに「世界遺産 熊野本宮館」がある。世界遺産登録五周年を機に和歌山県と田辺市によって作られた施設だ。この施設内に熊野本宮観光協会があり、そのウェブサイトのトップには、中辺路を紹介する文章がある。中世の熊野詣でに関する簡単な説明だが、文章の最後は「近年は『パワースポット』としても注目される熊野を、みなさんも歩いてみませんか？」と結ばれる。そして、実際に歩くためのガイドとして「熊野本宮語り部の会」が紹介される¹⁶。

語り部の会は 1990 年代に始まった活動で、養成講座を修了した案内人のグループである。語り部は熊野古道への来訪者と直に接する人々であり、彼らが同行するツアーの人気は高い。同会ウェブサイトでも熊野の見所が詳しく紹介されるが、

明治期の水害まで本宮大社があった大斎原については、「しかし、この地に立つてみるとまず空気が違う。社殿が移築された後でも、何かを感じさせる不思議なパワーが今なお存在する」と書かれている¹⁷。つまり、伝統宗教の枠組みではなく、それらから逸脱したスピリチュアル文化の観点から熊野古道が語られているのである。

さらに近年の興味深い動向を挙げておけば、2016年から、サンティアゴ巡礼と熊野古道の双方の巡礼を達成した人に、田辺市や熊野本宮大社が「共通巡礼達成証明書」を発行するようになっている。伝統的信仰という点で、この2つの巡礼に共通点を見出すことは難しい。両者をつなぐのは、メディア作品や世界遺産登録といった世俗の要因によって信仰なき巡礼者が増加し、寺社や教会といった宗教施設ではなく、そこに至る過程が重視されるようになったことだ。共通巡礼達成証明書には「道」という字が大きく描かれているが、現代の脱信仰化した巡礼のあり方を象徴しているだろう。

4. スピリチュアル文化としての聖地巡礼

4-1. パワースポットの作られ方

本節では現代日本に顕著な聖地巡礼としてパワースポット・ブームに注目してみたい。パワースポット巡りは2000年代以降の日本でもっとも広がりを見せた宗教現象の1つだが、広義のスピリチュアル文化に含まれる。

先行研究では、伊藤雅之が、スピリチュアリティを「おもに個々人の体験に焦点をおき、当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視な存在（たとえば、大自然、宇宙、内なる神／自己意識、特別な人間など）と神秘的なつながりを得て、非日常的な体験をしたり、自己が高められるという感覚を持ったりすること」と定義し¹⁸、弓山達也は「教団では束ねられない個人化された宗教意識」としている¹⁹。宗教組織や体系的な教義の枠組みを離脱し、個人を主軸に展開する宗教がスピリチュアル文化なのである。

しかし、重要なのは、パワースポット現象も含めたスピリチュアル文化は伝統宗教と全く切り離されたところで展開するわけではないことだ。むしろ両者は互いに影響を与え合い、その過程で新たな実践や言説が生み出される。

例えば、前節で取り上げた熊野に関しては、伝統宗教側の代表者といえる熊野本宮大社の宮司が興味深い語りをしている。同社のウェブサイトには宮司の挨拶が掲載されており、その前半では熊野三山と神仏習合の歴史が語られる。だが、

世俗社会の聖地巡礼：
信仰なき巡礼ツーリズムの広がり

中盤で世界遺産登録が言及されると、「この熊野の天地と御社殿と人との調和のとれた一体感が、訪れる人々の心と体を癒し、それが現代またパワースポット・スピリチュアルとして若い世代の人々から団塊の世代の方々まで注目を集めている」と説明され、「心の切り替えの場」として同社参拝が勧められる²⁰。神道の言葉とスピリチュアル文化が伝統宗教者によって接続されているのである。

スピリチュアル文化の裾野は広いが、その中でもパワースポット現象は伝統宗教との親和性が極めて高い。伝統宗教の信仰や実践が様々に流用され、伝統宗教側もスピリチュアル文化の言説を時に積極的に取り込む。こうした傾向はブームの当初から見られた。

現在のパワースポット・ブームのきっかけは、2009年12月、テレビのパラエティ番組で、島田秀平が明治神宮の清正井を紹介したことだ。島田は、大手芸能事務所に所属するタレントで、元々はコンビのお笑い芸人だった。コンビ解散後、「原宿の母」と呼ばれる占い師・菅野鈴子に師事し、手相教室の最初の卒業生となった。清正井についても、菅野とスピリチュアリストの江原啓之から教わったという。

島田によれば、明治神宮は、富士山から発した気が流れる龍脈上に立地し、その敷地で水を湧き出す清正井には特に気が集中するという²¹。この説明では、気や龍脈といった神道的ではないキーワードが用いられて清正井が説明されているが、実際のところ、既存の神道の枠組みを根本から否定したり批判したりするわけではなく、従来からある施設の効能をあらためて強調しているのである。

つまり、言説レベルで捉えれば、伝統宗教とは異なる語彙で伝統宗教の場を再解釈したのがパワースポット現象と言える。伝統的な宗教の場に、気・前世・守護霊・オーラといったスピリチュアル文化で用いられる概念が重ね焼きされるのである。そして、こうした特徴を踏まえれば、パワースポット現象を考える際には、その語り手と彼らが語る場に注目する必要があると言えるだろう。

4-2. 語り直される聖地

従来、聖地がどのような場であり、そこへの巡礼にいかなる意味があったのかを決めるのは、宗教組織と宗教者であった。奇蹟のメダル教会という聖地のあり方や聖母出現の意味は現在もカトリック教会が管理しているし、サンティアゴ巡礼の目的地である大聖堂は使徒の聖遺物を祀ってあるからこそ聖地とされる。メジゴリエの場合、カトリック教会の聖地管理と見神者たちの言動が衝突してい

た。

一方、日本のパワースポット現象では、様々な語り手たちによって、聖地のあり方や意味が多様化され、動揺している。まず注目したいのは、パワースポットが語られるメディアである。

多くの場合、伝統宗教教団は自前の新聞や機関誌などを有している。また、特定の宗教団体とつながらなくとも、宗教専門の雑誌や書籍を刊行する出版社も存在する。だが、パワースポットについて饒舌に語り、それを一般の人に届けているのはこうした宗教メディアよりも、ファッション誌、情報誌、旅行誌やテレビ番組など世俗のメディアである。

例えば老舗出版社の中央公論新社が発行する雑誌の1つに、100年以上の歴史を持つ『婦人公論』がある。2019年12月には、ムック版として『開運！パワースポット・ガイド 2020』が刊行されている。メイン特集では、地方ごとに「訪れるだけで福を呼びこむ」場所が180カ所以上紹介され、他にも「全国の神様図鑑」「持ちモノ風水で今すぐ開運！」「神様がよるこぶナチュラルお掃除術 33」といった特集ページが並ぶ。そして巻末には増刊号『江原啓之が行く！ペットとスピリチュアルに暮らす』の広告が掲載されている。

また『Hanako』は2009年頃から年末発売の1月号で、「幸せをよぶ、神社とお寺」という特集を毎年組んでいる。2018年1月号では、神社検定1級を保持する女性モデル、占い師も名乗る男性エディター、そして御朱印集めが趣味の女性アナウンサーの3人が、おすすめの神社について語っている。

鼎談は「都内屈指のパワースポット」である明治神宮に新しくできたカフェ「杜のテラス」で行われ、冒頭、男性エディターが李氏朝鮮の王族に仕えた風水師の家系の末裔である女性風水師の話を持ち出す。それによれば、2018年は「火の気を持つ年」で「天とつながりやすく」、「天からの気を吸収できそうなパワースポットがさらに力を持つ」という。この話を受けて、伊勢神宮、浅草の今戸神社、秩父の三峯神社といった、おすすめ神社の名前が挙げられてゆく。

注目したいのは、火の年や天とのつながりやすさといった話と名前のあげられた神社に特段の関連性が見られないことだ。自然と神社のつながりも語られるが、結局は、都会の神社でもパワーが貰えとされる。さらに鼎談中盤、男性エディターが女性風水師から教わったという「開運3か条」を明かす。「1. パワースポットに行く、2. その地の温泉に入る、3. その地の物を食べる」というものであるが、一般の観光旅行とまったく変わらないアドバイスである。

世俗社会の聖地巡礼：
信仰なき巡礼ツーリズムの広がり

スピリチュアル・ブームを分析したコンサルタントの有元裕美子は、スピリチュアル文化を精神世界と対比させながら、前者を明るさによって特徴づける²²。欧米のニューエイジ文化の輸入版である精神世界は非教团的な個人化した宗教文化であり、現在のスピリチュアル文化の前身と言える。だが、精神世界はニューエイジ文化由来の社会変革を目指す性格が強いのに対して、スピリチュアル文化は風水や占いを扱い、社会変革よりも、自己の変革や癒しといった色彩をまとっているのである。

そして、こうした違いをもたらしているのが、その文化が発信される場と語り手だ。パワースポットについて言えば、上で見たように、ファッション雑誌や旅行雑誌のような視覚的に訴える身近な媒体で、芸人・タレント・モデル・エディターといった肩書を持った「兼業解説者」と呼べるような人々が聖地について新たな語りを紡いでいる。彼らは、本格的な修行を積んでいたり、伝統宗教の流れをくんでいたりするわけではない。最初から霊能者として登場するのではなく、それ以外の形でメディアとつながりのあった人々が、自己流で聖地を語り直すのだ。そして先の熊野の例でも見たように、兼業解説者たちの語りは、伝統宗教の側にも浸透してゆくのである。

4-3. 開かれる聖地

ここでは、埼玉県秩父市の三峯神社を事例にしてみよう。同社は日本武尊の父・景行天皇の時代の開創と伝えられ、山岳修験の修行場としての歴史もある。同社の最大の特徴はオオカミを神の使いとする眷属信仰だ。農作物を猪などの獣害から守る神と見立て、狛犬の代わりにオオカミ像が設置されている。こうした長い歴史を持つ三峯神社であるが、2010年代頃から、「氣」をキーワードにした語りが見られようになった。

中でも注目したいのが「白い氣守」だ。同社では元々青地や赤地に氣という文字が記されたお守りが頒布されていたが、2012年夏頃から白地のものが限定頒布されるようになった。神職によれば、白は「神聖な色」であり、無垢を意味する。そして白い氣守を身につけておくと、1年間、同社境内の神木から「氣力を分けてもらえる」というのである²³。

白い氣守はテレビをはじめ各種メディアで取り上げられ、凄まじい人気を呼ぶ。だが、あまりの人気のために、頒布される日には参拝客による道路渋滞などの問題が生じ、2018年6月以降、頒布は中止されている。しかし、氣を軸にした同社

のパワースポット化は続いている。同社の入口や拝殿近くには、「三峯神社境内施設のご案内」として、次のような案内板が常設されている。

三峯神社境内施設のご案内

これより先、古木に囲まれ霊気・神気に溢れる三峯神社です。拝殿まえに聳える大杉は、武将畠山重忠公が奉獻したと伝わる、樹齢八〇〇年と推定される神木です。

最近では、『パワースポット』としても広く知られるようになり、活力ある毎日をお過ごしいただく為に、神木より『氣』をいただき、お帰りください。境内には、良縁を運んでくれる、縁結びの木もあり、『恋みくじ』が人気です。お帰りの際には、『興雲閣』で一休み。日帰り入浴『温泉 三峯神の湯』の他、お食事やご宿泊もご利用いただけます。いにしえの姿を今に留める『小教院』では、岩清水で淹れたコーヒーが味わえます。

また、多数のお土産を取り揃えた、『オリジナルショップ』や『酒売店』もございますので、登拝記念に、是非お買い求めください。天に近い神域、三峯山で、ゆったりとした時間をお過ごし下さい。

参拝客に対して、同社のどこで何をすれば良いのかが簡潔に示されている。神木の氣という宗教情報と温泉や土産物店といった観光情報が違和感なく併記される。さらに拝殿前の神木に行くと、どのようにして氣を貰うのかを解説する看板も設置されている。

神木より発する「氣」は活力そのものです。

神前にお参りの後、三度深呼吸をし神木に手を付けて祈ってください

静かに神木から「氣」をいただき

それぞれのお守りを常に身に付けお元気な日々をお過ごしください

尚、お守りは授与所でお受けください

神木や巨石などに触れたり、手かざしたり、抱きついてパワーやエネルギーを貰うといった行為は、パワースポット・ブームに特徴的な実践であるが²⁴、ここでは、それが三峯神社流の実践として定式化されている。そして実際、神木の前に列をなす参拝者のほとんどは看板の指示通りの実践を行う。両親と子供、カップル、独りできたと思われる人など、様々な参拝者が三峯流のやり方で神木に触れてゆくのである。

世俗社会の聖地巡礼：
信仰なき巡礼ツーリズムの広がり



写真 5：御神木に触れる参拝客（著者撮影）

これら一連の事例が示しているのは、パワースポット・ブームが伝統的な信仰とは必ずしも紐づかない実践を生み出す現象である。キリスト教をはじめとするいわゆる一神教と比較した場合、日本の伝統宗教である仏教や神道には、体系的な教義や実践は見出しにくく、その結果、兼業解説者をはじめとする外部の語りの影響を受けやすい。言い換えれば、体系的教義という防護壁がないからこそ、日本の寺社はパワースポット化しやすく、様々な信仰や実践を引き寄せる開かれた場所になりうるのである。

5. 結論

本稿では、世俗社会の宗教という問題意識の下、聖母出現の聖地、徒歩巡礼の聖地、そして日本のパワースポット現象について概観してきた。それぞれについてまとめておくと、まず聖母出現地では、歴史的に見ると、聖母の可視化・多動化と呼べるような傾向が観察できた。メダル教会に出現した近代最初の聖母は、メダル刻印の手本となる静的な絵として出現したが、その後の聖母たちは饒舌になり、身振りも伴うようになってくる。メジュゴリエの終わらない聖母出現は、情報メディアが拡充した現代社会への過剰適応とも言える。

次に、徒歩巡礼については、2000年代以降の再活性化が著しいサンティアゴ巡礼を中心に挙げた。その道を歩くのは伝統的な意味での信仰者ではない。彼らの旅を動機づけ、方向づけているのはキリスト教信仰ではない。むしろ、キリ

スト教に批判的なメディア作品である。先発の信仰なき巡礼記や巡礼物語が後続の信仰なき巡礼者たちを再生産し続ける。そして、目的地である聖地よりも、歩くという身体実践つまり聖地までの道のりを重視する価値観は、日本で再生される聖地巡礼にも取り込まれつつある。

そして、日本の 2000 年代のパワースポット・ブームは、宗教の私事化と脱制度化という現代宗教の変容が先端的に表出したものと言える。これらは元々世俗化論以後の宗教論において、特に欧米キリスト教を念頭に議論されてきた概念だが、体系的な教義を有さない日本の宗教文化では、それが聖地の多様化としてあらわれていた。様々な言説が聖地に入り込み、新たな実践を生み出し、時として伝統宗教側もそれらを流用するのである。

以上のような聖地巡礼の変容は、現代宗教について考える際の宗教概念の再考も促すだろう。従来、暗黙のうちにキリスト教がモデルとして想定され、信仰を中心に宗教が捉えられ、実践や所属は信仰の付属物と捉えられてきた。だが本稿でみてきた種々の聖地巡礼においては、いずれも脱信仰化が指摘できる²⁵。

聖母出現はそもそも教会の組織的信仰にとって不要で危険なメッセージをもたらしかねない。徒歩巡礼は、目的地に信仰的な価値が見出せなくなったからこそ、歩くという過程が意味を持つようになることで興隆した。そしてパワースポット現象は、信仰的な枠づけが弱い日本の寺社だからこそブームと呼ばれるほどの広がりを見せている。こうした聖地巡礼の脱信仰化は、現代人にとって宗教の位置づけや宗教との関わり方が根本的に変わりつつあることを示唆しているように思われる。

-
- 1 John Eade and Michael J. Sallnow eds., *Contesting the Sacred: The Anthropology of Pilgrimage* (London: Routledge, 1991), David Chidester and Edward T. Linenthal eds., *American Sacred Space* (Indianapolis: Indiana University Press, 1995).
 - 2 Kobi Cohen-Hattab and Noam Shoval eds., *Tourism, Religion and Pilgrimage in Jerusalem* (London: Routledge, 2014).
 - 3 Richard Butler and Wantanee Suntikul eds., *Tourism and Religion: Issues and Implications* (Bristol: Channel View Publications, 2018).
 - 4 Tim Oakes and Donald S. Sutton eds., *Faiths on Display: Religion, Tourism, and the Chinese State* (Lanham: Rowman & Littlefield, 2010).
 - 5 星野英紀『四国遍路の宗教学的的研究』法蔵館、2002 年。
 - 6 山中弘編『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社、2012 年、星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂、2012 年。
 - 7 ミア・ティッロネン「モノとパフォーマンスから見る宗教ツーリズム—京都市・晴明神

-
- 社の事例』『宗教研究』95(1)、日本宗教学会、2021年、南地伸昭「聖地巡礼ツーリズムの経験価値に関する一考察』『観光研究』32(1)、日本観光研究学会、2021年。
- 8 門田岳久『巡礼ツーリズムの民族誌—消費される宗教経験』森話社、2013年。
 - 9 岡本亮輔『聖地と祈りの宗教社会学—巡礼ツーリズムが生み出す共同性』春風社、2012年、同『聖地巡礼—世界遺産からアニメの舞台まで』中央公論新社、2015年。
 - 10 パトリック・ギアリ『死者と生きる中世—ヨーロッパ封建社会における死生観の変遷』杉崎泰一郎訳、白水社、1999年。
 - 11 関一敏「「光」の聖母と「地球」の聖母のイコノグラフィー—奇蹟のメダルの聖母出現(1830)について」『筑波大学地域研究』2、1984年、同『聖母の出現—近代フォーク・カトリシズム考』日本エディタースクール出版部、1993年。
 - 12 もっとも多い2011年は202万件を超え、コロナ禍で最少となった2020年でも38万件を数える。PODIJELJENE SVETE PRIČESTI MEDJUGORJE 1985 - 2021, <http://www.medjugorje.hr/en/medjugorje-phenomenon/statistics/> (2021年12月31日閲覧)
 - 13 Arthur Paul Boers, *The Way is Made by Walking: A Pilgrimage Along the Camino de Santiago*, Illinois: InterVarsity Press, 2007.
 - 14 土井清美「サンティアゴ・デ・コンポステラ」前掲『聖地巡礼ツーリズム』。
 - 15 小田誠太郎「世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」—その足跡と課題」『E C P R』えひめ地域政策研究センター、2010年、26頁。
 - 16 熊野本宮観光協会「世界遺産 熊野古道と熊野本宮大社」<https://www.hongu.jp/kumanokodo/> (2021年12月31日閲覧)
 - 17 熊野本宮語り部の会「大斎原—おおゆのはら—」<http://www.hongu-kataribe.jp/vocabulary/vc0007.html> (2021年12月31日閲覧)
 - 18 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ—現代人の宗教意識の社会学的探究』溪水社、2003年、iii頁。
 - 19 弓山達也「価値相対主義への応答—オウム真理教とニューエイジ運動」伊藤雅之・榎尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学—現代世界の宗教性の探求』世界思想社、2004年、251頁。
 - 20 熊野本宮大社「宮司あいさつ」<http://www.hongutaisha.jp/greeting/> (2021年12月31日閲覧)
 - 21 「話題のパワースポット、明治神宮「清正井」の謎に迫ってみた」(産経新聞 2010年2月8日号所載)
 - 22 有元裕美子『スピリチュアル市場の研究—データで読む急拡大マーケットの真実』東洋経済新報社、2011年。
 - 23 ぐるたび「毎月1日限定！秩父・三峯神社「白」い「氣守」誕生の秘密を探る」https://gurutabi.gnavi.co.jp/a/a_1770/ (2021年12月31日閲覧)
 - 24 パワースポットでの実践については、前掲のティッロネン(2021)を参照。
 - 25 筆者は、宗教を信仰・実践・所属の3要素に分解する視座を提案している。詳しくは『宗教と日本人—葬式仏教からスピリチュアル文化まで』(中央公論新社、2021年)を参照。